

呉錦堂を語る会通信

NO.34 Jun. 2017

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘 雄三 方「呉錦堂を語る会」
Tel. 078-911-1671
編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員
発行日 2017.6.15



神戸日華実業協会 創立百周年を記念して大倉山に「博愛」碑建立 前身「日支実業協会」創立に呉錦堂らが尽力

神戸在住の華僑と日本人実業家らでつくる神戸日華実業協会は、創立100周年を記念して、大倉山公園に石碑（以下、「博愛」碑と略します）を建立し、5月17日、除幕式をおこないました。

大倉山公園のこの場所には、向かって右から、「孫文先生之像」、「博愛」碑、「黎明之灯」碑（社団法人神戸福建同郷会建立）の三つが並んでいます。三つとも、それぞれの歴史の事実と、歴史の記憶を持って、孫文とも関係のあった大倉喜八郎のゆかりの地、大倉山に集合しています。

写真撮影は編集委員です。（編集委員 橘 雄三）



《1. 日支実業協会の創立に呉錦堂らが尽力》

日支実業協会創立のいきさつについて『孫文研究』第46号、安井三吉論文「楊寿彭と孫文」（2009年）から引用します。1915年の対華21ヶ条要求により日中関係が悪化していた時代のことです。

1917年2月、呉錦堂、鄭祝三、馬聘三ら神戸華僑の主だった人々が中心になって兵庫県・神戸市の政・経・官・文化各界の代表的な人々を招いて「中日親善会」を開催し、さらにこれに応じて日本人側が神戸華僑を招いて「日中親善会」が開催され、この二つの会合の成果として3月末には日支実業協会（後に日華実業協会と改称）が創立された。この一連の活動においても華僑側にあつては呉錦堂が代表、楊寿彭が幹事役を務めていた。日支実業協会の華僑側の評議員は呉錦堂、鄭祝三、王敬祥、常任幹事は楊寿彭と杜貫之であった。

《2. 「博愛」碑》

孫文直筆の右肩上がりの「博愛」はよく目にしますが、この「博愛」碑の文字は、元神戸大学長新野幸次郎氏の揮毫です。

また、背面には、同協会の歴代正副会長の名が記されています。2代目会長に瀧川儀作の名が、また、副会長には、初代楊寿彭、5代目陳徳仁、6代目林同春の名がみえます。

次に、「博愛」碑説明板の文章をあげます。

1917年（大正6年）、主として兵庫県在住の華僑と日本人実業家の親善を図り、以て経済提携の基礎をつくるべく、神戸市の長老、草鹿甲子太郎、実業家、本多一太郎等と華商の有志、呉錦堂、馬聘三、鄭祝三、王敬祥、楊寿彭等が賛同し神戸日支実業協会を創立した。

その後、一般社団法人神戸日華実業協会が華僑と日本人との友好親善、文化交流及び経済協力の志を継承した。

今般協会が創立100周年を迎えるにあたり、神戸にゆかりある孫文が愛した「博愛」の言葉をしるし建立するものである。

2017年5月17日

一般社団法人 神戸日華実業協会



呉錦堂の大阪時代（1888、89年頃）

呉錦堂の大阪時代は短い。その期間についても、商売の内容についても、資料はきわめて少ない。期間については、『呉錦堂』（2006年 財団法人孫中山記念会発行）「呉錦堂略年譜」の記述では、「1885年 長崎に渡り、泰鋁号と提携」、「1888年 大阪で義生栄号経営、マッチ販売」、「1890年 神戸に移住…」とあります。僅か2年ほどということになります。どういう商売をしていたのかについても、「略年譜」の記述、「義生栄号経営、マッチ販売」の原資料に辿りつけておりません。

ここでは、鴻山俊雄著『神戸大阪の華僑』（1979年 華僑問題研究所）の記述（傍線は編集委員）を中心に呉錦堂の大阪時代を見ていきます。
（編集委員 橋雄三）

鴻山俊雄著『神戸大阪の華僑』

三、明治二十二年、三年頃から明治末年頃まで

一般概況

清国商人はもともと商才にたけているうえ、渡日以来外国貿易を牛耳っていたので、まさに勃興せんとするわが国の軽工業、軽化学工業を等閑視するはずがなく、神戸、大阪両地の清商で、これ等の事業に資本を投下するものは少なくなかった。それらのものは、主として清国への輸出品工業に対してであって、マッチ工業、石鹼工業、洋傘工業

において特に著しいものがあつた。例えば、大阪府西成郡九条村のマッチ製造所三光社、同今宮村の分銅社等がそれである。三光社は、明治二十年八月の設立で、資本金は一千元、職工人員百三十名、山本孫七名義であるが、その実は、川口六十五番、清商祥隆号の資本により設立されたもので、山本孫七は名義の貸料として若干の給料を祥隆号から受けているほか、手代兼建物所有の名義人高畑藤吉は、かつて右清商の抱車夫であつたとい

う。また、諸方から三光社へ製造原料として売込む軸木、薬品等の代価のよなもので、すべて六十五番祥隆号から渡されるのが常のことであり、工場監督までも大抵同号の主人がするといふ有様であつた。

分銅社は明治十九年十二月の創立で、資本金は五千元、職工人員三百名にて盛大に営業、名義は木谷定次郎であるが、資本は同じく川口三番、広昌隆の手によつてなされ、一切の権利は同人の手中にあつた。

川崎村の建栄社も、神戸の清商七十番の資本により設立経営された。このほか、蝙蝠傘、石鹼製造業のように、資本を外人に仰いでいるがため、権力はすべて清商に掌握されるに至つたというものは少なくなかつた。高麗橋一丁目、蝙蝠傘商川瀬与三郎の川口三番呉錦堂における、また御堂筋備後町、石鹼商福井商店の川口清商十四番同孚泰におけるが如き、すべてこの例に属するものである。

《1. 大阪華商のほとんどは雑居地に居住》

商工省貿易局『阪神在留ノ華商ト其ノ貿易事情』（1938年）より引用します。

居留地ノ外安治川ニ臨ム富島ト古川町及ビ本田全部ヲ雑居地トシ、居留地ニ入ラザル外人及ビ支那人全部ハ此ノ雑居地ニ居住シタガ、有力華商ハ現在ノ本田小学校ヲ中心トスル四周辺に集中し、一般ニハ俗ニ番丁ト称セラレタ本田一、二、三番町辺ニ居住シテ居タガ居留地ニ近イ程有力華商ト見ラレテ居タ。当地華商ノ輸出ハ海産物、輸入ハ象牙、珊瑚、紅木（三味線用材）菜種、皮革、亜麻、唐紙ナドデ…。

《2. 華商の商売の仕方》

鴻山俊雄著『神戸大阪の華僑』から引用します。

大阪在住の華商には、独立して店舗を構えたものと、行棧に寄宿したものとがあつた。南幫公所

に属する者は店舗をもったものが多く、行棧に寄宿したものは僅々二三名に過ぎないが、北幫公所に属するものは行棧に寄宿したものが大部分を占め、（中略）。店舗を構えたものは、店の商号のほか何番館と称した。例えば十二番館鴻茂祥号というようなものである。この番号は適宜に付けるので別に意味がなく、実際欠番のものも少なくなかつた。商号は独立したものはもちろん自分の商号を付けるが、大部分のものは本国に本店があり、したがって本店の商号を用いるのが普通である。

《3. 呉錦堂は大阪でどんな商売をしていたのか》

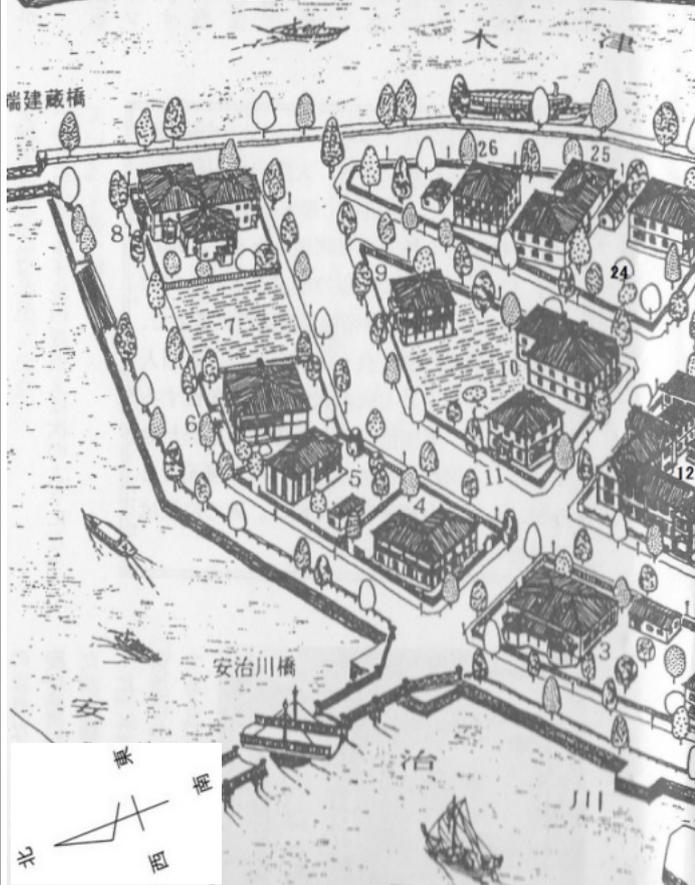
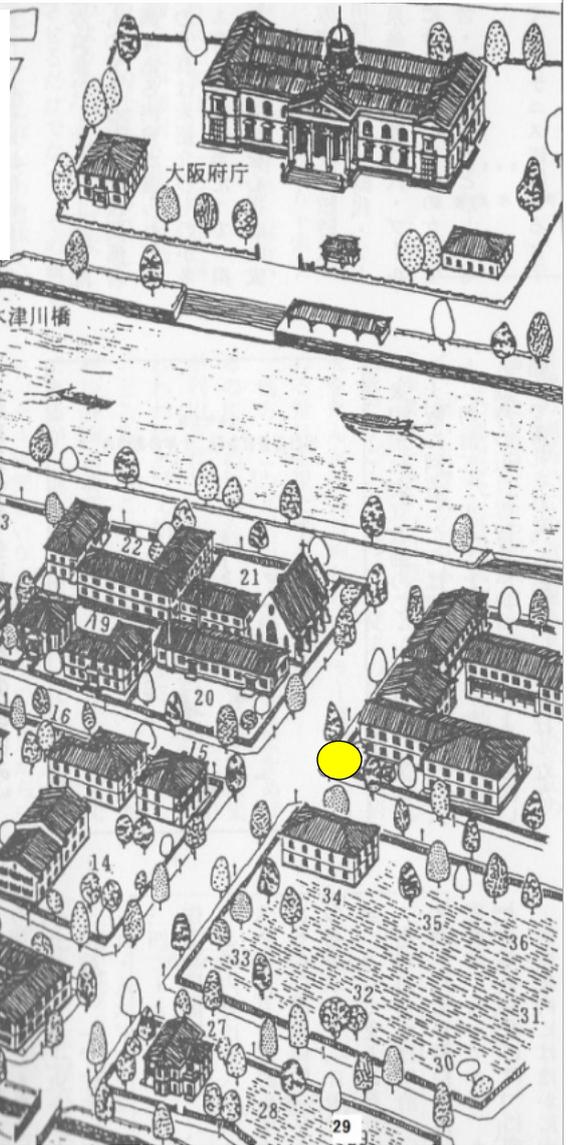
上記《2.》で、呉錦堂は南幫に属すし、彼が大阪にいた時期は、行棧が盛んになる時期よりかなり早いから、大阪時代の呉錦堂は、「風呂敷南京」と呼ばれた行商でも、行棧に寄宿していたのでもなく、規模はわかりかねますが、店舗を構えて商売し、日本人商店の実質的経営者にもなっていたと推察できます。

川口居留地概観

ここに掲載いたしました俯瞰図は、『川口居留地3』（1994年 川口居留地研究会）からの転載です。また、居留地名簿につきましては、『川口居留地1』（1988年）の記述を表形式にまとめ、転載させていただきました。これらにより、呉錦堂が大阪にいた1888、89年頃の川口居留地の様子がわかります。居留地は、慶応4年（1868年）7月設定時、26区画でしたが、明治19年（1886年）、27から36番までが拡張されています。なお、川は左手から右手へ流れています。華商は、その多くが、居留地に隣接する雑居地に居住していました。雑居地は、下図ではわかりませんが、居留地俯瞰図の右手に続く土地です。
 （編集委員 橋雄三）



この俯瞰図中、●印の位置（現在、大阪市立本田小学校敷地北隅）に、左の画像、「川口居留地跡」の碑が立っています。（画像、図中の黄印、及びこのコメントは編集委員の加筆です。）



地番	居留外国人氏名他	13	25
1・2	信愛孤児院	コール氏住宅	コールベ嬢、プール嬢住宅
3	ダン氏、チャップマン氏ほか住宅	アレキサンダー氏住宅	グリツリ氏住宅
4	エピングストーン氏、ワーレン氏住宅	テイラー博士住宅	セプト・メリー・ホーム
5	ランニング博士住宅	アンダーソン氏、ミラー嬢ほか住宅	不明
6	セントアグネス学校	不明	不明
7	マッキンス氏住宅	プール女学校	不明
8	聖パルナバ病院	ヘール氏住宅	電信局
9	不明	大阪鉄工所	不明
10	ファーブランド商会	聖提摩太教会(現川口教会)	ハーロース氏、ポルター氏住宅
11	デーボア氏住宅	照暗女学校	居留地会議所並に領事警察署
12	三一神学校	プール氏住宅	テニスコート
		オールデン氏住宅	エドモンド氏、ホルランド氏住宅

呉錦堂は舞子から砂浜を馬にのって明石まで遊びに行った

(陳舜臣著『神戸ものがたり』より)

陳舜臣著『神戸ものがたり』(1981年、平凡社)から、呉錦堂に関係した箇所を抜粋引用し、紹介いたします。1200字ほどの短い文章です。傍線と①②数字は編集委員の加筆です。画像は編集委員が挿入しました。なお、原文引用については、陳舜臣アジア文藝館の許諾を得ております。(編集委員 橋雄三)

陳舜臣著『神戸ものがたり』
より抜粋引用

中国人実業家呉錦堂(大正十五年没)が舞子に「移情閣」を建てたのは、大正六年のことである。①いまは海のすぐそばで、護岸のおかげでやつと波から守られているような状態だが、新築当時はその前にひろい砂浜があり、呉錦堂はその砂浜を馬にのって、よく明石まで遊びに行っていたという。いまは馬の通れそうなどころはない。

移情閣はふつう六角堂と呼ばれているようだが、じつは八角形になっている。八方の窓からみえる景色が、それぞれちがうという凝った建物だ。孫文も立ち寄ったことがあり、庭には彼の「天下為公」の碑もある。この移情閣の門前で孫文が在神華僑のおもだった連中とうつした記念写真があるが、孫文の隣りには呉錦堂が坐っている。

呉錦堂は村松梢風の『近世名勝負物語』にもあるように、鈴久こと



鈴木久四(ママ)郎と鐘紡株をめぐって、死闘を演じたことで有名な人物である。鈴久との勝負には一応負けたことになっているが、鈴久がけつつきよく安田銀行に持株をぜんぶ持って行かれて没落し、呉錦堂が三菱の融資で息を吹きかえしたことを思えば、負けるが勝ちということになってしまった。

呉錦堂が鐘紡の重役になったのは、三井が手放そうとした鐘紡株を、武藤山治の懇願で買い取ってからである。彼はその株をもとに、鈴久と雌雄を決することになったのだ。

この事件が有名すぎるので、呉錦堂のほかの事蹟があまり知られていない。だが彼の小束野の開拓は、忘れてはならない事業である。開拓をはじめたのは明治四十一年ごろで、水田耕作は大正六年に一町二反から開始し、昭和五年ごろには六十町歩の水田をつくりあげた。

いまここは約四百人の住民をもつ村落となっている。もとは呉錦堂が巨額の資金を投じて山林を拓き、入植者の家をたてたのが村落の基である。開拓者を記念するため、昭和三十三年に土地の人が呉錦堂の顕彰碑をたて、宮ガ谷池を

「呉錦堂池」と改めた。

呉錦堂は浙江省出身で、明治十八年、包み一つ背負って日本の長崎へ渡ってきたのが三十一歳のときである。のち大阪の川口に移って行商をやった。一介の貧しい出稼人にすぎない。日本に渡ってくるまで、彼が国でなにをしていたか、じつはよくわからない。どうせ生活苦にあえぐ貧乏青年であつたらうが、彼自身も国にいたころの話はあまりしたがらなかった。たのしい思い出などなかったのちにない。だから、②彼の前身については、いろんな伝説がある。ひどいものになると、国で船頭をしていたとき人を殺したので、日本に逃げてきたという説もある。成功者は他人から嫉妬されるので、そんな話をつくられたのであろう。

呉錦堂は海の彼方からやってきた。しかし、国内から出稼ぎにきた日本人のなかでも、過去を葬って、神戸で人生のスタートをした人は多い。神戸はそんな人をうけいれる町だった。自分の出身や経歴を知らない人たちのなかで暮らすのは、暗くみじめな過去をもつ人には、まことに気らくであつたらう。

編集委員コメント

傍線①■興味深い話です。呉錦堂の孫、呉伯瑄氏は、「初耳です。お祖父さんのことは、長生きだったお祖母さんからよく聞いていましたが、そんな話は聞いたことがありません」とおっしゃいます。

ところで、寧波市政协文史委編『呉錦堂研究』2005年出版に次の記述があります。「当年、神戸市民看到的那个身着中式服装绅士模样的人，骑着马悠闲地在明

石海边沙滩上散步，谁能了解他那翻滚着的内心呢」

陳舜臣氏の著書が典拠となっているようです。

傍線②■陳舜臣著『三色の家』に、ほぼ同じ記述があります。主人公陶展文に、親しい友人が父親を語るくだりです。「国にいた頃、渡し船の船頭をやっていたのは事実らしい。或る金持を乗せたとき、父がその人を殺して、携えていた金を盗んで逐電したという伝説がある」。エッセーと小説の違いはありますが…。